

「既に」と「未だ」

——キリスト教にみられる二つの人間理解——

永島孝子

I 「既に」と「未だ」という概念

「既に」と「未だ」という言葉は、時を表す副詞であるが、ある抽象概念を形成する際に、始めに「既に」そのものがあると認識する場合と、「未だ」ないと認識する場合は、そこに形成される概念構造が別個のものになりはしないだろうか。

例えば、同じ「春」という認識対象についても、これを「既に」と認識する場合と「未だ」と認識する場合は、次のような具体的自然現象についての認識の相違が生じてくる。「春は既に (already) 来た」と言った場合、我々は、それを、自然のなかに見ようとする。芽吹いた木々、さえずっている小鳥、降り注ぐ太陽の光、これらは、どれもみな「春の証し」になりうるであろう。ここでは、草木の日々の変化や、小鳥のさえずりの変化や、陽光

の色あいの違いが問題なのではなく、それらに見られるあらゆる差異、そこに生ずるあらゆる変化にもかかわらず、変わらぬひとつの春が「既に」あることが問題となるのである。言い換えれば、光や木々や鳥は、「春の中に包み込まれて」いる。この意味で、自然は静的な存在として捉えられるであろう。

一方、「春は未だ (not yet) 来ない」と言った場合、全く同じようにそこにある自然であっても、それらは、「春の証し」にはなりえない。しかし、だからといって、それらが「冬の証し」だというのではない。「冬」から「春」へ向かう途上にあるものなのである。従って、「来るべき (yet to be) 春」へ「向かうもの」として、認識されることになろう。ここでは、木々や、小鳥や陽光の、違いが問題となるのであり、「それぞれ」の春へ向かっての刻々の変化が注目されるのである。「未だ」来ない春の全体像

は、わからない。しかし、それぞれの自然がばらばらに春に向かっているというのではなく、降り注ぐ太陽のもとで、木々が芽ぶき、そこで鳥がさえずるといふように互いに関わりをもちつつ春を形造っていつているのである。こうした意味で、自然は動的な性格をもつものとして、捉えられるであらう。自然から春を認識するし方にも、次のような特徴がある。

「既に」と言う者にとっては、たとえ木々の芽がどんなに堅くとも、小鳥のさえずりがどんなに拙くとも、たとえどんな春の到来を否定しうるような自然現象があつたとしても、それらを越えて「春」は「既に」あるのである。一方、「未だ」という者は、ひとつひとつの自然の刻々の変化に即して、順々に確かめながら春を捉えていこうとする。「たとえどんな……であらうとも」という思考は起こらないのである。

このような見方を抽象と具体との関係で整理してみよう。

抽象について「既に」の認識が先行したとすれば、具体は、抽象の「証し」として捉えられらうであらう。具体は、どうなるかという視点ではなく、「何であるか」という視点で、つまりその「存在の意味」が問われることになるのである。ところで、「既に」ある抽象は、個々の具体を包み込んでゐる。逆に見れば、具体は、既に結ばれた一体性のなかにいるということになる。この点で、具体は、「みな」(all)という視点で捉えることが可能になる。つまり、具体認識のうえで、個々の具体の「共通性や普遍

性」に注目しようとする傾向が生じるのである。具体から抽象を認識するし方は、現実には認識される具体と、「既に」と仮定することで認識可能となる抽象と、その隔たりを解消することで可能となる。それは、具体を「越える」ことによつて抽象を認識するし方である。

一方、抽象について「未だ」の認識が先行したとすれば、具体は、抽象に「向かうもの」として捉えられる。従つて、具体は、何であるかという視点ではなく、「どうなるか」という視点で、つまり「存在の動機」が問われることになるのである。その志向性において個々の具体は共通していても、向かうという途上にあるという点で、個々は、変化し動的である。そこで、具体の「変化や差異」に注目しようとする傾向が生じる。そうして捉えられる具体は、みなではなく「おのおの」(each)なのである。具体から抽象を認識するし方において、前者と根本的に異なることは、抽象については、「未だ」わからないという点にある。従つて、認識可能なのは、飽くまで具体である。抽象概念は、具体がそれに向かつて「順序よく近づいていく」その過程で形成されることになる。

本稿では、この二つの認識パタンの可能性を探る目的で、キリスト教における人間理解について検討してみた。

II キリスト教における二つの可能性

宗教としてのキリスト教は、人間の聖なる側面を積極的に理解しようとする。キリスト教に共通する、人間の聖なる側面についての理解として、ここでは、次の二つを取り上げてみたい。個としての人間の聖なる側面として、人間の「原罪からの救い」、共同体としての人間の聖なる側面として、「キリストの体」としての共同体という概念である。仮に、上に述べたような認識パターンがあるとすれば、次のような二つの、現実の人間についての理解の可能性が想定されよう。聖なるものが、「既に」と仮定するならば、現実はその「証し」として捉えることが可能である。とすれば、現実はこの世で、人間の罪からの救いの「証し」を見ることが可能だという考えが導かれるであろう。聖なるものの証しとしてのサクラメントについては、カトリックとプロテスタントでは、認められるものが異なるが、重要なのは「原罪からの救い」が、「証し」として認められているかどうかである。これを認めているのは、カトリックだけである。また、一つのキリストの体についても、「既に」と仮定するならば、現実の目に見える教会が、歴史を越え、全世界に共通に、その「証し」として一つでなければならぬという考えが導き出されるであろう。カトリックは、このような認識のもとに、教会組織をもっている。

一方、聖なるものが、「未だ」と仮定するならば、現実はその「向かうもの」として認識される。とすれば、人間の罪からの救いは、現実には「未だ」見ることができないことになろう。しか

し、だからといって、罪のままに留まっているというのではなく、救いに向かっているのだという考えが導かれるであろう。このような考え方は、「原罪からの救い」をサクラメントとしてではないところの「義認」と「聖化」という概念で説明するプロテスタントに見出すことができる。また、一つであるキリストの体についても、「未だ」と仮定するならば、現実の目に見える教会は、それに向かうものとして、必ずしも一つとは限らないという考えが導かれるであろう。プロテスタントは、現実の教会に、その多様性を認めている。

そこで、カトリックとプロテスタントの人間理解について、どのような傾向の相違があるか見てみたい。

III キリスト教にみられる二つの人間理解

1 カトリックの人間理解

カトリックの個としての人間についての理解は、人間は成長の時を越え、「既に」一個の人間であるという考えに基づいているといえる。まず、避妊を認めていない。その理由は、「すでに始まった生命の発育を直接妨げること」⁽¹⁾だからであるとしている。そして、妊娠中絶もまた認めていない。それは「受精の瞬間すでに人間でなければ、決して人間になることはない」とし、「受胎の時から、胎児は神から第一に受けた生きる権利をもっている」⁽²⁾という考えによる。もちろん、カトリックにも「成長」の概

念はある。しかし、それは、「未だ」ないものに向かうという視点ではなく、「既に」ある変化の段階のなかに「入ること」という意味で理解されているように解せられる。カトリックでは、

「洗礼」は幼児の時に行われなければならないとしている。「すべての人間は、成長の度合、年齢にかかわらず、平等⁽⁵⁾」であり、教会が「すべての人に、成人と同じく子供にも、最初の、基礎的秘跡である洗礼を授けよう⁽⁶⁾」するからというのがその理由である。カトリックの「聖化」についての理解は、「未だ」ない聖なるものに近づいていくという観点では捉えられていないと言える。なぜなら、第一の「聖化」である「洗礼」によって、人間は「すでに恩恵の状態にある⁽⁷⁾」としており、その「洗礼」の後に犯した罪を司祭に告白し、そのつぐないをしたなら、「神の名によって司祭から罪の赦しを受ける」ことができる（悔悛の秘跡⁽⁸⁾）と考えているからである。

カトリックの共同体としての人間についての理解は、個々の人間は、「既に」結びついて一体となっている、即ち共同体というものが「既に」あるという認識に基づいているといえる。「共同体はまず各メンバーが共に「ある」ためにつくられたと認識するところからはじまる。他人との絆が織りなされてきたとある朝突然気づくと、参与と忠誠の約束を自らすすんで決断する⁽⁹⁾」というような表現にも見られるように、個々人が、「未だ」ないものを造っていくのではなく、寧ろ「既に」あるものに「目覚め」てそ

の「なかに入る」というような理解がある。カトリックでは、離婚が認められていない。「キリストの秘跡によって神聖なものとなった」（婚姻の秘跡）ものは、不解消⁽¹⁰⁾だと考えられている。もし、聖なる結びつきが「既に」あるという認識に立つとするなら、分離というものは理論的に成り立たないであろう。カトリックは、現実の教会が、一つであると考えている。教会とは、個を越えた、あるいは、すべての個を包み込むものであり、教会は、「既に」ある一体性において捉えられている。教会は、「超個人的な統一」をなして救いを求める全人類を包括するキリストの体である⁽¹¹⁾。あるいは、「教会の一体性は、教会のカトリック性と密接に連関している。このカトリック性とは教会が内的にも外的にも統一を保ちつつ全世界に普及するとの意味である⁽¹²⁾」という表現に示されている。また、教会は、時を越えて、一つであると理解される。

「カトリック性が教会の内面的本性であるとすれば、教会はその公の誕生、すなわち聖霊降臨の日以来カトリックであったはずである⁽¹³⁾」としている。カトリックにおける多様性の認識では、一体性が先行している。つまり、「既に」まとまりがあつてその中に多様性があるという理解である。「カトリック性はそれ自体において、教会を厳密に唯一であると同時に、また無限に変化に富んだものとする特性、あるいは本性である。唯一性のなかに多教性があるということは、その唯一性、あるいは無限の表現と実現に富んだ唯一性を告げる⁽¹⁴⁾」従つて、カトリックにおけるエキムニ

ズムの意味には、次のような特徴があるといえよう。まず、「唯一の教会の中に分裂が起こった」という理解において、ひとつでない教会の実際が認識され、「分かれた兄弟」が、人間を越えた聖なるものの力によって「唯一の教会の一致のうちに集められるであろう」という「既に」ある一体性を先行する観点である。

このように、カトリックの人間理解は、個としてその生に注目したとき、それがどうなるかという視点より、寧ろ「何であるか」という人間の「存在の意味」を重視する傾向があるといえる。また、個々の人間の他との関わりについては、それぞれというよりは「みな」が「すべて」がという視点で、そこから「普遍性」や「共通性」を導こうとする傾向があるといえよう。

2 プロテスタントの人間理解

プロテスタントの個としての人間理解は、「未だ」罪深いものであるが、しかし、聖なるものに向かうものだという考えに基づいているといえる。「人間は、信仰により義とされるが、罪人であることをまぬかれない……それゆえ、かれは罪に対して戦う人間である」とは、「not yet」の概念であり、「しかしまた未来が閉鎖されない人間である」とは、「yet to be」の概念でとらえられるところの、即ち「向かうもの」としての人間理解である。このことは、人間は成長の時に即して、「未だ」ない一個の人間に成るべく形成されるものだという認識に通じているといえよう。

「人間形成という部分が十分になされるかどうかということが教育活動全体の成否というものを決定していく」というように、人間形成作用としての教育が重視されるのである。さらに、その教育においては、「お宅のお子さんとよそのお子さんが違っているのならば、なぜ問題になさるのでしょうか、私ならさういいます。その違いが尊いのです」というように、個々の差異が重視される。「聖化」の概念もプロテスタントでは、「既に」あるものの中における過程としてではなく、「目標を、目指して前進する努力」つまり、「完成への志向」と、「完成に向かっての前進」という概念で捉えられている。「未だ」その目標、終点は、見えないのである。「義認論は人間の救済——要するにそれが人間にとって問題である——は人間の手中にはなく、まったく神のみ手の中にあることを告白するのである」というように、プロテスタントにおいては、秘跡としての罪の赦しは考えられていないのである。「神と人間の間で起こること、つまり神の恩寵による人間の義認と和解は……特定の個人的情況において起こるのである。神と各々の人間の間の歴史は、……当該の人間自身にもその隣人にも一部隠されていて、その意味がまだ自覚されていないかもしれない。しかしこの歴史は、また一部現れている」としている。

プロテスタントの共同体理解は、「未だ」結びついていない個々の人間が互いに関わりあって造っていくものだという、またここで、形成概念が強い。「『エクレーシア』、民の集会は『存在

する』のではなく、『起る』、あるいは起るることによって存在するのであり、それは一つの出来事である⁽²³⁾。また、『エクレシヤ』は、単なる集合ではなく、行動する統一である⁽²⁴⁾。という表現にこの認識が示されている。プロテスタントでは、キリストの体としての教会について、目に見える教会と、目に見えない教会という、二つの表現をつかうことがある。聖なるものは、「未だ」見えないのである。「われわれが教会であるのではなくて、教会になるのです。……教会は静的でなくて動的である時、この神の動き、聖霊の働きの中で、常に新しく、教会となっていくのです⁽²⁵⁾。」また、「教会はこの望み、終わりの時への望みに生きます⁽²⁶⁾。」というように、目に見える教会は目に見えない教会に向かって進むものとして捉えられている。現実の教会は、「未だ」と仮定するなら多様でありうるのである。この観点からすれば「教会の分裂は、教義学者にとつては、かれらの研究の自由を重視することから生ずる真の分裂というよりむしろ多種多様な神学的学派の範囲内における教義学的感受性の種々の型、さまざまな神学的伝統の表現のように思われる⁽²⁷⁾。」というように、その多様性は、分裂なのではなく、寧ろ出発であり、向かう姿として捉えられることになる。従つて、プロテスタントにおけるエキュメニズムとは、「既に」ある一体性のなかにはいることではなく、多様性が結合していくという意味で理解されているといえる。「教会合同 (Church Union) を目標とする「一致運動」あるいは、「教会合同へ向かう

(*Toward a United Church*)」⁽²⁸⁾ また「すべてがその各々の場所と共に生長する過程 (All in each place—The process of growing together)」⁽²⁹⁾ というような、その教会一致運動における表現が、そのことを示していると言えよう。

以上のように、プロテスタントの人間理解は、個として人間の生に注目したとき、それが「どうなるのか」という「人間の存在の動機」を重視する傾向があると見える。この人間の個の「変化」に注目しようとする傾向と同時に、個々に「差異」を見い出そうとする傾向がある。共同体とは、そのような視点で捉えられた「それぞれ」の個が他との関わりをもって、形成していくものだという理解なのである。

3 人間理解の相違と二つの認識パターン

聖なるものを認識しようとすることは、キリスト教においては「信仰」を意味する。もし、上にみたようなカトリックとプロテスタントの現実の人間についての理解の相違が、二つの認識パターンの可能性を示すものなら、両者の「信仰」についての理解の相違にも、初めにみたようなそれぞれのパターンに即した相違が見い出せるのではなからうか。聖なるものを「既に」と認識しようとするなら、その方法は、現実を「越える」ことよつてなされるであろうし、仮に、聖なるものが「未だ」とみるなら、それは現実がそれに向かつて「順序よく近づいていく」ことよつて認識されるであろう。

カトリックでは信仰は、「越える知」であり、「与えられた知」として理解されているといえる。「信仰は、正当な飛躍である。そしてその飛躍によってこそ正当化される。ゆたねることに於いて、ここに生命、成長、道があることを感じるのである」⁽³⁰⁾。また、「人間の理性的性質そのものに已に存在・真理及び善の究極絶対の原理への秩序が認められている。天啓によって神自身が人間に神の存在と彼の救世企画とを絶対的な明確さを以て顯示している」⁽³¹⁾。という説明にこれを見い出すことができる。一方、プロテスタントでは、信仰は、「向かう行為」であり、「導かれる行為」として理解されているといえる。「信仰は途上にある」⁽³²⁾。「信仰は、神を頼りとすることを決断することによって、神が存在することを「知る」⁽³³⁾。「信仰へと近づいて来る、信仰が信じている真理が「啓示」を意味する」⁽³⁴⁾。というような説明がそのことを示しているであろう。また、この相違は、「信仰によってすでに掌握したものを知性によって理解しよう」とつとめることに神学の糸口がある⁽³⁵⁾。とするカトリック神学と、「プロテスタント教義学の態度は、……信仰が明晰な方法でその本来の対象を説明できる点にまで信仰を導こうとする」⁽³⁶⁾とするプロテスタントの教義学の相違にも通じるところがあるといえる。

以上のような、キリスト教にみられるカトリックとプロテスタントの人間理解の相違は、人間のもつ認識パタンの二つの可能性を示すものとして捉えることはできないであろうか。

- (1) ジョン・A・ハードン編著、浜寛五郎訳『現代カトリック事典』エンデルレ書店、一九八二年、「避妊」の項。
- (2) 同、「妊娠中絶」の項。
- (3) F・ルロット、増田和宣訳『人生と教会』『人生の探究』第四巻、エンデルレ書店、一九六二年、四〇ページ。
- (4) ジャン・パニエ、伊從信子訳『共同体—ゆるしと祭りの場』女子パウロ会、一九八七年、一〇九—一〇一〇ページ参照。
- (5) 教理聖省、前川登訳『幼児洗礼に関する訓令』カトリック中央協議会、一九八一年、七ページ。
- (6) 同二八ページ。
- (7) 『現代カトリック事典』、「聖化」の項参照。
- (8) 同、「悔悛」「悔悛者の行為」「悔悛の秘跡」の項参照。
- (9) ジャン・パニエ『共同体—ゆるしと祭りの場』六七ページ。
- (10) 南山大学監修『第2バチカン公会議 公文書全集』中央出版社、一九八八年『現代世界憲章』第二章第一章四九(夫婦愛)の項参照。
- (11) カール・アダム、霜山徳爾訳『カトリシズムの本質』吾妻書房、一九五三年、一七五ページ。
- (12) パウロ・フィステル『基礎神学講和』(改訂増補版) 中央出版社、一九四七年、一六七ページ。
- (13) A・レティフ、山村直資訳『カトリックの精神』ドン・ボスコ社、一九五九年、六二ページ。
- (14) 同五七ページ。
- (15) 『教会憲章 付エキュメニズムについて』中央出版社、一九八六年、一一七ページ。
- (16) 同二〇ページ。
- (17) ロジエ・メール、波木居純一訳『プロテスタント神学』白水社、一九八一年、八四ページ。
- (18) 熊沢義宣『聖書の人間理解と今日の教育—特に人間の価値をめ

くつて——東神大バンフレット21、東京神学大学出版委員会、一九八六年、六ページ。

(19) 同二七ページ。

(20) 赤木善光『聖化』東神大バンフレット11、東京神学大学出版委員会、一九八五年、四五ページ。

(21) H・オット、沖野政弘訳『教義学』ヨルダン社、一九八八年、八〇ページ。

(22) 同八二ページ。

(23) O・ヴェーバー、畑祐喜訳『集められた共同体』新教出版社、一九七九年、四三ページ。

(24) 同四六ページ。

(25) 加藤常昭『教会とは何か』東神大バンフレット2、東京神学大学出版委員会、一九八八年、一八ページ。

(26) 同三九ページ。

(27) ロジエ・メール『プロテスタント神学』八一ページ。

(28) 平賀徳造『全世界教会運動の経過と目標』『神学』Ⅳ 東京神学大学神学会編、一九五五年参照。

(29) 日本信仰職制研究会編『教会一致の神学』教文館、一九六五年、一六七ページ参照。

(30) オランダ司教団編、J・ヴァン・ブラッセル、山崎寿賀共訳『新カトリック教理』ヘンデル代理店/エンデルレ書店、一九八三年、三四二ページ。

(31) パウロ・フィステル『基礎神学講和』二六ページ。

(32) H・オット『教義学』八六ページ。

(33) 同九〇ページ。

(34) 同三〇ページ。

(35) ビエール・アドネス、渡辺義愛訳『カトリック神学』白水社、一九七九年、三〇ページ。

(36) ロジエ・メール『プロテスタント神学』七一ページ。

(ながしま・たかこ、教育学、東京学芸大学助手)